副　　本

令和３年度 第１回吉川市総合教育会議録

令和４年１月７日（金）

令和４年１月７日　令和３年度 第１回吉川市総合教育会議

開会の日時	令和４年１月７日　午後１時１５分
閉会の日時	令和４年１月７日　午後２時４７分
会議開催の場所	吉川市役所３０１・３０２会議室

会議に出席した構成員の氏名

吉川市長　中原　恵人

吉川市教育委員会	教育長	戸張　利恵
	教育長職務代理者	中島　新太郎
	教育委員	小林　照男
	教育委員	鈴木　真理
	教育委員	荒井　一美

構成員以外の出席した者の職・氏名

〇市長部局の出席者

政策室長	浅水　明彦
政策室副室長兼主幹	岡崎　久詩

〇教育委員会事務局の出席者

教育部長	中村　詠子
副部長兼学校教育課長	馬場　重弘
教育総務課長	石田　和親
生涯学習課長	岩上　勉
学校教育課学校支援担当主幹 兼少年センター所長	砂賀　正史
学校教育課ＩＣＴ教育推進担当副主幹	広井　毅

傍聴人　３人

会議に付議した事項

（１）小中学校における新型コロナウイルス感染症への対応について

（２）ＩＣＴ教育の現状及び今後の進展について

（３）吉川市いじめの防止等のための基本的な方針について

○中村教育部長　ただいまより令和３年度第１回吉川市総合教育会議を開会いたします。本日は、「小中学校における新型コロナウイルス感染症への対応について」、「ＩＣＴ教育の現状及び今後の進展について」、「吉川市いじめの防止等のための基本的な方針について」、市長と意見交換をしていただきたいと考えております。なお、本日の会議時間につきましては、概ね１時間３０分程度とさせていただきます。

次に、本日の会議録の署名委員を決めたいと存じます。「吉川市総合教育会議運営要綱第５条第３項」の規定により、中島教育長職務代理者、小林委員にお願いしたいと存じますが、よろしいでしょうか。　［「了解」という声あり］

では、お二人に署名委員をお願いいたします。

それでは開会にあたり市長から開会の言葉をお願いいたします。

○中原市長　皆様、新年おめでとうございます。今はさわやかな天気となりましたけれども、予想が大きく外れまして、昨日の夜から今日の朝にかけて雪となり、職員総出で雪かき等の対応に追われていました。今日皆さんにお会いすることができないのではないかと思いましたけれども、こうしてお会いできて大変嬉しく思います。

昨年も本当に皆さんから大きなお力をいただきありがとうございました。コロナも手探りではありましたが、皆さんからいただいたご意見ご指導を踏まえて、大きな混乱もなく、クラスターが発生することもなく、現場の先生方も必死に対応していただく中でどうにか授業も進められましたし、様々なイベントも形を変えながらも実施することができました。市として修学旅行等中止になったものに対して、ぎりぎりまで現場の先生方にはご努力いただく中で、それでもキャンセル料が発生した場合は、市で負担する形で、わずかではありますけれども、支えさせていただいております。

今またコロナがかなり拡大をしており、今後も様々な対応をとっていかなければいけない中、ぜひ皆さんからもご意見をいただきたいということで、今回の議題１はコロナ対応についてとなります。

次に、議題２のＩＣＴですが、これもこれまで皆さんから様々なご意見をいただき、その積み重ねが充分吉川市にはありました。そのおかげをもちまして、国が一人１台タブレットを決定した後も、非常にスムーズに展開ができたのかなと思います。まずは志を基本にした非認知能力の向上を目指そうという、基本理念がしっかりしていましたので、そこからタブレットを利用しての昨年末の児童生徒プレゼンテーション大会、そして過日行われ

た吉川中学校での政策発表会など、本当にこの１年間の中で素晴らしい成果を、ある一定程度皆さんにお示しすることができたかなと思います。同時に、今後の展開については、身体的な影響が今後様々考えられると思いますし、またリテラシーを含めたいじめ問題は、ＩＣＴと切り離せない問題だと思いますので、成果の評価だけではなく、課題解決に向けての皆さんのご意見をいただければと思います。

そうした中で、議題３のいじめ防止等のための基本的な方針の内容の検討についてですが、これは総合教育会議で皆さんのご意見をいただくのは初めてになると思います。以前、いじめの重要案件に近い事例があった時に、加害した側の人権への配慮について、皆さんとかなり熱く協議をしたことがありましたが、やはり、被害を受けた子どもたちの教育をどのように守り、そしてそれを遂行できるかという視点は、若干吉川市では欠けていたかなと思いますし、議会でも議員の方からそうしたご指摘をいただいています。

今日、この議題を出させていただいたのは、そうしたことを踏まえてです。今日結論が出るとは思っていませんので、今後の方針、考え方を、皆さんの今までの経験を照らし合わせた中で、様々なご意見をいただければと思います。会議時間は１時間３０分くらいを予定しています。ぜひ実りある会議にしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○中村教育部長　ありがとうございました。それでは、これより進行につきましては中原市長にお願いいたします。

○中原市長　それでは、議題１「小中学校における新型コロナウイルス感染症への対応について」を議題といたします。事務局から説明をお願いします。

○馬場副部長兼学校教育課長

【資料１「小中学校における新型コロナウイルス感染症への対応について」説明】

○中原市長　まだ３，４カ月前のことですけれども、本当に随分前のような感じがします。まず夏休みについてですが、委員の皆様からもスピード感をもって対応してかまわないという形で支えていただいていましたので、教育部と健康長寿部と合わせて協議して、はっきりと理由がつけられる指標にしようということで、他市を見て横並びをすることをやめました。その結果、食事の部分、スポーツの部分にしっかりと配慮することによって、子どもたちの学び時間を確保しながら新学期がスタートができた結果、大きく感染も増えなかったので、一つのやり方として私たちが学べたのかなと、今後色んなところで提供できるのかなと思っています。

もう一つ、吉川市は草加保健所が管轄になりますが、草加保健所もかなり感染人数が増えて、業務がひっ迫する状況が続いていましたので、当市からも保健師を派遣させていただき、少しでも業務を軽減できるような形を図りました。

そうした中で、もし学校で陽性者が出た場合は、濃厚接触者ではなく、要観察者という形に切り替えた形で、ＰＣＲ検査費用を市が全面的に負担させていただくという体制を整えましたが、実際に受けた人はいなかったです。

現場の先生方にお力をいただき、保護者の方も県外に働きに行く方が多い中で抑えられたというのは、皆さんがしっかりと取り組んでくださった結果かなと思います。

副部長からもあったように、今まさに感染が広まってきているので、まず最近の小林委員の周りの状況と、今、気を付けていることがあれば教えていただきたい。

○小林委員　私どもの園では、出始めました。今日１園休園になりました。ですから、オミクロン株が近づいているというよりは、もう来ちゃったというような状況です。

今まで経験したことから申し上げると、一昨年の１２月末頃からＰＣＲ検査を受けるという情報がいっぱい入って来るようになりました。それで年を明けてから、陽性者が出始めて、保育園の休園がいくつか出始めたと。ですから、まずＰＣＲ検査を受けるという情報が入るようになってくると、そのあと時間を空けて陽性者が出てくるというような状況で、同じようなことが、７月・８月がそういった状況でした。酷かったのが８月下旬から９月第１週、第２週、ここがピークでした。その前からとにかく検査を受けるという人が、かなりの人数が出てきて、対応に困った部分ですと、昨年１月の時には、例えば１か所陽性者が出ても、間を少しずつ空けて発生してくる。本部の対応は、一つの対応が終わって、次の対応にいけると、ですからバックアップが効いたと。それと比較して、８月下旬、９月上旬は、同時に起きてくるので、本部のバックアップ機能が間に合わなくなる。さらに同時に起きていたのが、検査の結果が、保健所からもはや届かないので、対応ができない。それから保健所に問い合わせしても保健所と連絡が一切つかない。そうすると独自判断で、ある程度ことを進めていかなければならない。それが同時多発的に起きたので、９月第１週、第２週は、実際例えば学校や保育園で起きてしまうと、そこが閉鎖状態になって、職員の数をミニマムにして、電話対応とかに当たらせる。電話問い合わせが殺到するので、ミニマムの二人ぐらいの事務職員を置いて対応するのですが、他の職員がいないので、そこを本部がバックアップ体制する。そして、その人員が今度不足して、具体的に起きたことを言うと、私自身は山形で発生したところの現場対応にあたりました。ですから非常に

危機感を持った。一か所ずつだったらどうにかなるのですが、まとめて出てきた時には、対応が難しくなったというのが経験したところです。

今回オミクロン株にそれを当てはまると、実効再生産数が非常に高いので、同時多発に発生した時にどうするかということを前提に､対策をしておくといいのかなというところが、過去の経験値によるところです。

それともう一点、教職員が感染しない対策について、言いづらいことですが、吉川市は埼玉県内の他市と比べると対応が早かったという感覚になるかもしれないが、ワクチン接種については、我々の感覚では埼玉県はとにかく対応が遅かったというようなイメージがあります。ですから、これからのオミクロン株への対応については、教職員がまず感染しないように、ブースター接種を医療従事者と同じように早められるような、現場に出ている人から優先に対応ができるとよろしいのかなと思います。昨年の状況を外から見て感じたところです。今までの対応を去年までの感覚ではそういったところですが、冒頭で申し上げたとおり、もうすでに出始めましたので、喫緊の課題として対策を始めた方がよろしいのかなと思います。

○中原市長　今一度、学校で発生した場合のスキームの見直しと、各学校の振り返りをしてもらい、教育部もその時どう動くか、市長部局もどう対応するかもう一度確認しましょう。

もう一つは、先生方の先行接種は、前回も課題になり、どこまでの人をエッセンシャルとして捉えるかについてかなり議論しました。先生方も外の市から来ている人もすごく多いので、どう対応していくかとなった時に、エッセンシャルとして先生や保育士を個別に扱わず、高齢者からの順番でいこうと決断したんですけれども、今の小林委員の話を踏まえて、一回私が持ち帰ります。そして、健康長寿部長と話をして、どう捉えるか、３回目接種がもう始まっていくので、接種券が高齢者から発送されているので、そこを踏まえて一度預からせていただきます。これは市長部局で考えます。

他に、コロナに関してご意見はありますか。

○鈴木委員　今思うのはコロナに皆さん慣れてきたのかなという感じがして、街中でもマスクをしない人が増えたのかなと実感しています。学校の対応は徹底したマニュアルがあるので、学校に関しては安心しているのですが、保護者の方の意識づけが少し弱まってきているかなと感じているので、保護者の方に向けてのメッセージも少し強めに発信していただけるとより安心できるのかなと思ったので、よろしくお願いします。

○中島教育長職務代理者　今のお話で、オミクロン株に感染していても無症状であるという傾向が出てきている状況であれば、感染していても子どもが登校して来ている場合があるということを考えなければならない。学校として、非常に緊張した対応が必要かなと思います。

○中原市長　メール配信で保護者の皆さんに対して啓発が出来るかなと思いますので、しっかりと対応をお願いします。

○荒井委員　オミクロン株は非常に感染力が強いということと、重症化はしないにしろ、既に第６波が来ているというニュースを耳にしています。その中で、今後、卒業式、入学式がありますが、そういったこれから起こるであろう式の対応を考えていかなければいけないかなと感じています。オミクロン株がニュースで騒がれているので、保護者の意識も少し変わってきているとは思いますが、今後行われる大きな行事に対して、保護者向け、学校向けの今後の対策を、今から準備していかなければいけないかなと感じています。

○中原市長　入学式、卒業式に関しては、現場の先生方は今までかなり丁寧に対応してくださっているので、緩めずにしっかり対応していけば大丈夫かなと思います。

○戸張教育長　貴重なご意見をありがとうございます。私は一貫して、全国で感染者が少なくなった時点の校長会においても、決して楽観視をしないでくださいと言い続けてまいりました。今委員の皆様もおっしゃったような、先見性を持った対応をしなければならないと。最近出した通知においても、欠席者の状況等をよく把握して、様々なことを慎重に判断してほしいと通知しました。保護者の皆様も非常によく理解してくださいました。感染拡大防止と学習保障の両面、そういったことも含めて、委員の方のご意見をしっかりと伺い、市長部局の皆様ともしっかりと詰めて、とにかく安心安全な教育を進めていきたいと思います。

○中原市長　それでは議題２に移らせていただきます。「ＩＣＴ教育の現状及び今後の進展について」、事務局から説明をお願いします。

○広井学校教育課ＩＣＴ教育推進**担当副主幹**

【資料２「今後の吉川市のＩＣＴ教育のあり方について」説明】

○中原市長　まず、昨年見ていただいた、児童生徒プレゼンテーション大会の様子を振り返っていただいて、委員の皆様から感想などを聞かせていただければ思います。

○鈴木委員　見させていただいて、本当に子どもたちが素晴らしかったので、本当に一言すごいなというのが感想です。今後はこれをどう継続していくかというところに視点を重視していただいて、これを是非１年に１回、できれば２回くらい開催していただけると、どんどん定着化していくのかなと思います。また、今回は個人でしたが、人前で話すのは苦手だけれども、パソコンの作業は好きですというような子どもたちもいると思うので、グループ対抗というような取り組みもしていただくとまた面白みが出てくるのかなと感じました。これはずっと続けていただきたいと思います。

○中島教育長職務代理者　私も鈴木委員から話があったように､非常に感銘を受けました。子どもたちが自分でテーマを考えて、自分で調べて、それをきちんとまとめて自分で発表する、スタートから最後まで自分で完結させる、非常に素晴らしいと思います。子どもたちに最後までやったという自信を持たせた、非常に良い取り組みだなと感じています。これからも吉川の学習の一つのテーマとして続けていくことで、子どもたちが成長していくのではないかと感じました。学校でこれをどのように醸成させていくか、子どもたちが自分で発表していこうという雰囲気を学校でどう作っていくか、それが大事になってくるのかなと思います。発表を見ていて、この子は学校では人前に出る機会があまりない子もいるのかなという感じがしたが、そういう子が学校の現場でつぶされてしまうような雰囲気の学校経営になってしまったら子どもは育っていかない。ああいう子どもたちをどう育てていくかという雰囲気を、学級全体、学校全体で、どう作っていくかがこれからの課題だと思います。

○荒井委員　大変良かったと思います。私は子どもたち一人一人の良さが生きる場が一つ広がったと感じました。例えば運動能力が高い子は市内陸上競技大会等で、英語が得意な子は英語弁論大会で、それぞれ色々な場面があり、そこに新たにプレゼンの場が設けられたということで、そこに輝ける子がいたなというところがとてもよかったと思います。子どもたちが自ら手を挙げて参加し、そして自らテーマを見つけて、人に与えられたものではなく自ら学習する。プレゼンに限らず、そういう子どもたちを吉川市は育てていくことが大事になってくる。そしてそういう子どもたちが広がっていくという教育が今後なされていけばいいなと思います。社会教育と学校教育がつながって、子どもたちを育てていく場であればいいなと思います。

○中原市長　２年前、広井先生たちと一緒に現地に行った時に、子どもたちが同じようなプレゼンを私たちの前で、中学生は英語を使ってプレゼンをしてくれたんです。その姿を

見て吉川市でも同様のことを行いたいと準備をはじめ、今回担当の先生方も、コロナもある中で、本当に大変だったかと思いますが、一つの形にはなったことは大変嬉しく思います。今、鈴木委員から継続性の話がありましたが、これを続ければ吉川の子どもたちの文化になると思うので、ぜひ継続していきたいと思います。

あと、中島委員からもありましたが、今までなかなか光が当たらなかったり、大きなところで話をする機会がなかった子どもたちがすごい大活躍でした。コミュニケーションの仕方に少し特徴がある子が堂々と発表する姿が非常に興味深かったので、そういう活躍の場を作っていくということでも、さらに広げていけたらと思います。あの時間ではあの人数しかできなかったので、もっと広げるとなると予選が必要なのかなとか、チーム戦が必要なのかなとか、工夫をしてすそ野を広げていかなければいけないと思っています。

○小林委員　まず、総合的には素晴らしかった。感動しました。まず子どもたちが実施できたことは非常に素晴らしい。そしてもう一つ素晴らしかったことは、これを吉川市でやったこと、なかなか他のところではここまで踏み切れないところを吉川市が先行してやったことが非常に評価できるところ。特にこの状況下ですから、その中でもやったことが素晴らしかったと思います。

それだけに、今後発展的にどう継続させるかということに課題を持っていったらいいのかなと思います。その視点から申し上げると、二つポイントがあって、一つは、主体的対話的深い学び、いわゆるアクティブラーニング的な考え方、それから２１世紀型の学びの考え方の視点からいうと、参加した子供が自ら手を挙げて自らのテーマを深堀りして、それを伝えたと、ここまでは主体的な学びになっていたと。ですから多様性を認めなければいけないなかでの個々の光を引き出す機会になったと。

もう一方で、鈴木委員が触れられてましたけれども、対話的というところで、個々の子どもたちの主体的な学びを深堀りしていくというところは出来たので、次の段階はこれをどう対話的に持っていくかと。対話的と言ったときに、チームワーク的なものをどうするか、もちろん個人戦もあってもいいと思うのですが、多様な能力を持った子どもたちが力を合わせて素晴らしいものができるという経験を担保させてあげたい。

人に伝えるといった時に、今回はプレゼンテーションのアプリを使って言葉で伝えたと。おそらく伝えるということで言うと、それが言葉でなくても、音楽であっても、芸術であっても、何か伝える方法、手段はいくらでもある。そうすると言葉で伝えることが得意な子と、芸術的な才能がある子はそれを用いて言葉と組み合わせることによって、新たな伝

え方、若しくは、例えばそこに音楽が加わってとか。ですから色々な才能を持っている子どもたちが集まって何かを生み出すというような対話的な活動の結果にさせる部分も、発展的な部分で、次の段階ではそういった試みもフォーカスを少しあててみると、主体的対話的なプレゼンになるのかなというところがあります。

次に、プレゼンテーションという視点で見た時ですが、プレゼンテーションというのは、ＩＣＴ機器を使いこなすことだけがプレゼンテーションではなくて、例えばこのような場所でどうやって自分の思いを伝えるかとか、相手の気持ちをどう理解するかとか、というようなそういうものを含めて、プレゼンテーションという広く捉えていく。

今回、割と年齢が高い大人たちが感動したのは、自分が使えないパワーポイントを上手に使いこなしているという視点になってしまった。パワーポイントを上手に使うということももちろん大切だと思いますが、そこに頼らずともプレゼンテーションする技術というのもあっていいのではないでしょうか。ですから、口で伝えるという方法については、プレゼンテーションがパワーポイントベースでいって、パワーポイントよく作ったなと確かに思ったのですが、アプリとか技術は進化して変わっていってしまうので、おそらく１０年後にはパワーポイントは過去のものになっているのだとすれば、今無理にそこの使い方を上手にということよりも、別の視点も少し持つといいのかなということが、発展的に深めるという二つの視点です。発展というところでいうと、実は子どもたち素晴らしかったので、大人たちがもっと準備してあげればよかったなと思いました。例えば資材的に何か足りないものがあったり、具体的に言うと、パワーポイントが背面に映し出されて、前にモニターがなかったので、子どもたちが後ろを見ながらプレゼンする形になってしまったので、子どもたち用にモニターを前に置いてあげればいいとか、今回はハンドマイクでやったので、片手がふさがった形でプレゼンしたので、これをピンマイクに変えるだけで、全身を使ったプレゼンテーションに変えられる。こういうところは大人の方の準備の問題なので、発展的に継続させるためには、ぜひ大人ができる手段として、お金を出して、きちんと提供してあげる。単純に市の予算を増やしてくださいという話ではなくて、私は民間の人間として感じたのは、このような子どもたちが大人になって社会で活躍してもらいたいという思いを強く持ちました。ということは私自身が企業の経営者として思ったのは、ぜひ我々がスポンサーしてあげたいと。もし機材がないのであれば、あるところが貸してあげるとか、例えば予算がないのであれば企業版ふるさと納税を使って、こういったところに役立ててもらいたいというような仕組みを作って、大人たちがバックアップできる体

制を作れるようになりたいと。ですからこれは私自身の自戒を込めて、これはもっと大人が考えてあげればよかったなと、お金を出してあげるだけではなくて、何かできることもっとあったはずだろうと思いました。おそらく同じように考えている企業もたくさんいらっしゃるので、これを広く周知することによって、さらに発展するのではないかと思います。

○中原市長　ありがとうございます。今回、大西先生に非常にお力をいただいたのですが、やはり民間の方にももっと見ていただいて、今小林委員からもお話があったように、機材面もそうですし、プレゼンの仕方もさらに世界と戦う、あるいは仕事として使いこなせるとかそういったレベルを現実的なところで教えてもらえるような、そういった連携を深めていければと感じました。もう少し講評を丁寧にひとつずつしてあげて、もう少し相手にうまく伝えるというところの評価を図ってあげるというところは、私も感じたところです。

○中島教育長職務代理者　○○賞など、評価をしてあげた方が、子どもはさらに、来年はあれをやってみようと次のステップにつながっていくのではないかと思います。そういう意味では、例えば今回は２０人位でしたが、２０人位でしたらそれぞれ○○賞のような賞をあげてもいいのかなと。そういう子どもの意欲につながる、上位３位くらい順位をつけて、あとは○○賞のようにしたらどうかと思います。

○中原市長　是非その点も含めて、継続的で発展的でというキーワードで考えていければいいかなと思いますが、教育長どうですか。

○戸張教育長　中島委員のお話の中にもありましたが、今回行ったことを、学校でどのように醸成させていくかが大切になり、また、そのことにより様々な子どもがより多く活躍できる場が増えていくことになると思います。確かに、学校にこれをお願いしてやってくださいと言えば、学校は行ったと思いますし、もっと、ある意味質の高いものもあったかもしれません。ただ、そこにこれだけの感動があったかどうかというのはなかなか難しい判断だったかもしれないと思っています。多様性をしっかり認めながらいろいろなお子さんが輝ける場があるのが本来の学校であり、学校はそういう場でなければならないと考えています。

今お話しを伺って、やはりそういった場がある学校経営、学級経営、しっかりと教育していく必要があると思います。現在教育課程については、各学校で、鋭意改善していただきたいとお願いしているところでございます。どの学校でも、全てのお子さんが活かされ、どの学校でも子どもたちが活躍が出来る場があることが望まれます。

ただ、片やそれをしてしまうと、光が当たらなくなってしまう部分もあるかもしれないので、非常にそこは難しいところだと思います。私たちもしっかりともう一度課題を見直しして、個々やグループ、あるいは個々の力をさらに活かせるような場面に加えて、小林委員が言われた、主体的対話的な深い学びや、２１世紀型の学びについても併せて考えていきます。例えば単にパワーポイントを使ったプレゼンテーションという形ではなくても、学んだことを子どもたちが、他の方法で、例えば映像にしていくというようなこともしかしたらできるのかもしれないと思います。「継続と発展」をキーワードにして、さらにしっかり進めていければと思います。

○中原市長　確かに一気に学校全部でとなると、薄まってしまうし、また光が当たらなくなってしまう子も増えてくるかもしれない。教育長の話を聴いているとあまりそこは急がなくてもいいかなと思います。手上げでも構わないので、内容とか、周りのバックアップの形を小林委員の話も念頭に入れながら固めていくうえで、今後自然に広がっていくというイメージを持ちながら、次回どう進めていくかの協議を始めてくれればいいかなと思います。

○中島教育長職務代理　先ほど鈴木委員、小林委員からもありましたが、ＩＣＴ教育を進めていけば、それぞれ子どもは伸びていきます。その時我々も見落としやすいのは、コロナの関係もありますが、協力性というか、共同作業が出来なくなるんですね。パソコンは、連携はできますが、体を使って一緒に何かを作り上げるというのがなかなか作りづらい。協力して、お互いに力を合わせて何かを作り上げていく、これはやはり大事な非認知能力の一つだと思います。そういう意味で、やはりそこを落とさないような、ＩＣＴ教育の方法が何かないのかなと感じました。

○中原市長　今の中島委員のお話の引き続きですが、資料１４ページ下段を見ていただきたいと思います。１人１台タブレットを先生方の分を含めてうまく使っていただいている状況の中で、今後さらにどこにどう力を入れていくか、予算配分していくかというところで、エビデンスベースでの状況把握、体系的な教職員への支援、また中島委員からも話があったように、機械だけに頼って、コミュニケーションが不足してしまわないかといった危機感や、目や体の発達等への身体的な影響なども含めて、今後の注意点について、ここは気を付けていった方がいいというご意見をいただければと思います。

○小林委員　ＧＩＧＡスクール構想がステップ０で始まったところで、まさにエビデンスベースの状況把握と出ているので、この段階で一度検証作業というかエビデンスをきちん

と求める作業をした方が良いと思います。具体的に言うと、今やってみて課題があったのではないかと思います。課題をしっかりと洗い出す作業をすることによって、次に進めるというイメージがあります。今、やってみたら意外とできているという感じになっていますが、私自身が約１年近く俯瞰して感じたのは、先ほど小学校低学年についてはパスワードを数字で入れているという話がありましたが、まさにパスワードの問題にしても、無理やりアプリケーションのレベルを下げて数字だけにしてしまっている。しかし、本来の使い方で言えば、数字だけのパスワードは非常な危険なパスワードで、教育的にはやらない方が良い。きちんとしたパスワードを使って、定期的に更新していくというのが、ＩＣＴリテラシーですから。結果的に今出てきた課題で考えれば、ローマ字教育が出来ていないから仕方なく数字でやりましたと。だとすればそこが課題であって、我々幼児教育の世界で言うと、マストではないが、小学校に入学するまでにはひらがな文字の読み書きができるまではというカリキュラムでやってきました。最近我々がカリキュラムの見直しを始めたのが、そこに、もはやローマ字を入れないといけないのではないかと。具体的に言うと、数字の９とローマ字のＱの小文字は、子どもたちが見た目で区別が出来なかった。これはやってみて初めて分かったことで、そういったことが見えてくると、次に何をすべきかということがおそらく見えてくる。その意味では、担当者の方、現場の先生方の中で、一旦きちんとした会議体で課題を徹底的に洗い出すということをやると、中島先生が言われたことについても一緒に議論できるのではないかと思います。おそらく、事業者も実証を進めているところだと思うので、事業者サイドも求めているのではないかと思います。

○中原市長　今、予算編成の真っただ中なので、一つの基準になるのが、今後の在り方というところで、今日皆さんから議論いただいた、エビデンスベースでの状況把握であったり、体系的な教職員への支援というところには予算をしっかりとつけていかないと、今後進まないのかなと思っています。小林委員からもありましたが、課題の洗い出しの検証といった部分に予算がかかれば予算措置をしたいと思います。

エビデンスベースという言葉をよく使いますが、何をもってエビデンスベースとするのかというところが、ずっと手探りで来ているような気がします。教育部ではいくつか資料を作ってくれているので、説明しようと思えばできると思いますが、それが全てかというと疑問に思うし、エビデンスベースというのは吉川市としてこういう風に集めて、こういう風にジャッジしていくといった柱が欲しい。そうすれば予算編成も明確にどこに付けていくのかが見えてくると思うので、是非エビデンスベースという言葉を協議いただいて吉川

版を作りたいと思います。

○小林委員　数字で出てくる部分についてはデータをまず集めることが必要だと思いますが、データについては、今実践しているから市内の小中学校にあるんですよね。それをまとめてデータを分析するという作業が非常に大変。ただ例えば、データが欲しいと、それを解析したいという学術機関があれば、吉川市と連携して学術機関に対してデータを提供して解析してもらうことによって、エビデンスを作り上げていく。おそらくエビデンスは何年か取り続けなければいけないので、長期戦にしてやっていく。そしてそれを学術機関と組むというような方法があるのではないかという意見と、もう一つ、非認知の部分で言うと、エビデンスについては非常に難しくて、実は私どもで東京大学と一緒に研究したのですが、結果、エビデンスにならなかったというケースがありました。

ただ、国でも予算を付け始めたので、そういった意味では、予算が付いた学術機関と連携が取れれば、データを渡して研究をしてもらうというような取り組みができるのではないかと思います。

○中原市長　課題の洗い出しの会議をやるときに、その終着地点の一つに、エビデンスをどう吉川市として確立するか、エビデンスの取り方、何をもってエビデンスとするかを議題に入れて、現場の先生方からの意見をある程度まとめてもらったうえで、この会議でエビデンスについて皆で検討しましょう。また、非認知能力もようやく全国的に使われ始めて、色んな所の研究機関で色んな発表をしているので、それを含めてまた吉川市としてどうジャッジしていくかというのも次に検討していきたいと思います。

２番目の体系的な教職員への支援についてはどうですか。今実際現場からの声は、人数が欲しいとか回数を増やしてほしいとか、支援員さんの質の問題などは出ていますか。

○広井ＩＣＴ教育推進担当副主幹　ＩＣＴ支援員については、現場の要望は非常に強いです。吉川市として順調にスタートできたのは、実はＩＣＴ支援員が月２回、適切な支援があったからだと思っています。

○中島教育長職務代理　教職員をどう育てるかということが大変大きな課題だと思います。ICT 教育をこれから継続的に進めていくと思いますが、その時に教職員が最も大事になってくる。教職員は、支援員からの色々な支援を受けて勉強はしますが、教員の意識づけ、共通理解、こういう子どもに育てたい、ICT 教育を使ってこういうような子どもになってほしい、そういうものが見えてくると、教員はそこから先に進むのですが、これを使ってみてください、こういう風にやるとこんな授業が出来ますよというものを与えても、そこ

に動機が出てこないと、受け入れられない、さらにその先に進まない。学校で先生方の共通理解、何度も話し合いを重ねて、こういう子どもを育てていこうという目標を確立させて、教職員の能力の育成という方向に持っていく必要があると思います。

○荒井委員　昔パソコンが学校に入り始めた時、担任をしている時でしたが、電源を入れて、皆がつながったかどうか確かめると授業の半分の時間が過ぎているというような、そんな時がありました。なので、１校に１人支援員がいてくれて、パソコンを使うときに子どもの支援をしてくれたらいいなとすごく思いました。でも、技術的な支援と、教員は教育者なので、目の前にいる子どもたちをどう育てたいのか、どういう子どもにしていきたいのか、目の前にいる子どもはクラスによって違いますが、足りない部分や秀でている部分が色々とあると思いますので、そこをきちんと担任は見て、ここを指導していきたい、こういう子どもたちに育てていきたいという理念があって、その手段として、こういう技能も出来るんだよと。やはり担任が主でなくてはいけないと思うんです。支援員ばかりに頼ってはいけないと思うんですね。でも、１校に１人支援員がいたらどんなにいいだろうなと思ったのは事実です。

○戸張教育長　まさに目指す児童生徒像は全ての教職員がしっかりと認識をするということに尽きます。そのために校長会等々、様々な機会にお話をしてきました。既に１１月に本市の目指すＩＣＴ教育や本市の目指す教育の方向性をお示ししました。その中で、ＩＣＴの使い手になることのみが目的ではない、私たちはこういうお子さんを育てたい、そのためには、荒井委員がおっしゃったように、どんな問題でもそうですが、まず最初のファーストタッチ、入口になるのは担任なんですね。その担任を育てるのは現場の校長であり、先生方であり、教育委員会だと思っています。２月に各学校ごとの教育プランのプレゼンを計画していますので、その時にも再度確認をしながら、しっかりと共通の思いをもって、目指す児童生徒像をしっかりと動機づけるような機会にしたいです。

もう一つ、荒井先生がおっしゃったように、専門的な見地の人がいるとありがたいというのが確かにあります。今、市には大西支援員がおりまして、ＩＣＴ教育に非常に長けた方で、学校は非常に大西支援員の研修を求めています。身が一つしかありませんので、大変厳しい状況ではありますが、何とかそこをやりくりしながら良い研修をしていきたいと考えています。先ほどお話にもありましたけれども、やはり人を配置するなど、そういったところを手当して学校を支援していきたいと思います。

○中原市長　今後もＩＣＴ教育に関するエビデンスベースをどう確立するのかということ

と、教職員への支援が人だけではなくて、先生方自身がどのように子どもを育てていくのかという理念の部分にも力を入れて、進めていきたいと思います。そのためにも課題の洗い出しをしっかりと進めていきたいと思います。

○小林委員　ＩＣＴとかタブレットの活用の中で、今、対子ども、対教職員のことについてお話していただいたのですが、一つの機能として対保護者への機能の活用について、ＰＤＦの配信が可能になったということで、さらに取り組みとして充実した機能とか、使っているものがあれば教えていただきたいと思います。

もう一つ、メールを活用することによって、印刷、そこに係る人の削減について、これはＳＤＧｓの取り組みと考えると、効果としてＳＤＧｓが出てきたというイメージになると思いますが、印刷時間の削減とか業務の変化など、分かるものがあれば教えていただきたいと思います。

○石田教育総務課長　お答えいたします。一点目ですが、従来の保護者メールは添付ファイルがなくて、文面のみを送信しておりました。そのため市教育委員会から配信する場合には、仮に小学校向けに通知するものであっても、全小中学校に一斉に配信しておりましたが、今年度から小学校向けであれば限定して配信することができております。学校においては、一例ですが、修学旅行に関する急ぎの通知などにおいては、対象学年の保護者に限り配信するなど、必要な情報を必要な時に、迅速にお知らせすることが出来ているほか、ＰＴＡ活動においても、通知配信の要請があれば、それに応じて配信するなど、利活用の幅が広がっていると伺っています。

もう一点、削減効果についてですが、令和３年度秋から、児童館と給食センターにおいては、定例の配布物は、紙ベースから保護者メールに移行しています。児童館は印刷業務に月平均１２時間、年間で１４４時間かかっていましたが、確実に削減できたことによりまして、他の事業への早期取組、新たな事業の企画立案、時間外の縮減が図れているとの報告を受けています。また、保護者からは必要な時にスマートフォンなどで何度も見ることができ、カラーで見やすいとの声を伺っています。

給食センターにおいても、配布枚数が毎月多かったので、特に美南小学校のような大規模校においては、事務支援員が毎月半日かけて行っていた各クラスへの振り分け業務がなくなり、大幅な業務改善になっているということです。また定例の印刷業務がなくなったことにより、印刷機のリース契約をやめるなど、ランニングコストの削減も図れている状況です。

○小林委員　非常にいい効果が、教育以外のところでも出ているのかなと思います。

○中原市長　それでは議題３に入ります。「吉川市いじめの防止等のための基本的な方針について」を議題といたします。事務局から説明をお願いします。

○砂賀学校教育課支援担当主幹兼少年センター所長

【資料３「吉川市いじめの防止等のための内容の検討について」説明】

○中原市長　これは自分たちのスピード感で結論を出して改訂するものですので、今日をスタートに委員の皆様からは今後ご意見をいただきながら、結論が固まった時点で改訂するかあるいはしないかを含めて検討をしていきます。

背景にあるのが、まず、いじめた加害者側の子の人権にすごく重きを置いてきた吉川市の流れがあるということと、私のところへは様々ないじめや学校での問題行動の情報が入ってきていますが、特に最近、発達に課題を抱えた子どもたちが加害者になっている事例が非常に多いです。それも、ひとつのクラスの中に複数人いるので、学校の先生が一生懸命指導してもなかなかいじめや暴力的な行為が収まらなかったりという事例が本当に増えています。そうなると、被害を受けた子が学校に行かれないのに、加害をした子はずっと学校に行っていて、しかもなかなか先生の指導がそこに入っていかないという事例が、すごく増えてきているんだと思います。そういうことを踏まえて、今後どう解決していくかという視点で、皆さんにご議論いただければと思います。

皆さんが実感されていることや、方向性に対してのご意見を伺って、今後進めていきたいと思います。

○小林委員　まず加害者に対する対応について、しっかりと規則化するなり、やり方を決めることは大切なことで、ぜひ前向きに進めてほしいと思います。ただ、やはり加害者側の人権、教育を保障するというようなことも議論しなければいけないので、時間をかける必要がありますが、早急に手を付けて、前向きに議論すべきだという意見です。

○中島教育長職務代理者　出席停止の問題は、私が現職の頃に校内暴力があって、その時に文言が入り、これはやむをえないだろうと。被害の子どもが学校に登校できない状況になっているのであれば、加害の子どもを出席停止にして、被害の子どもを守るという考え方に立って、実際そういうことはなかったのですが、そういう考え方に立って進めてきたものですから、やはりいじめの問題にしても、いじめた子に対して、どうしてもこのまま収まらなければ出席停止を命ずることはできる、こういう文言を入れていいのではないか。

ただ、先ほど話が合ったように、出席停止にした場合に、加害の子どもに対してどれだけ面倒を見てあげることが出来るか。どれだけ配慮して、その子の教育権を奪わないようなきちんとした対応をして出席停止を命ずることが出来るという形で、取り上げればいいのかなと思います。

○荒井委員　今、中島先生がおっしゃったとおりだと思います。それに加えて先ほど市長がおっしゃったように、発達障害の子どもの話が出ていました。発達障害の子どもは、増えているというか、理解されてきているところですが、本当に障害別による対応の仕方が違うと思うんですね。発達障害に対する正しい理解、対応を、教員はきちんと学ぶ必要があると思っているのと、加害者になる子の親の教育も必要ではないかと思います。

○鈴木委員　私も皆さんと同じで、出席停止に関する記載は必要ではないかと考えます。ただし、人権に関してはとてもデリケートな部分なので、これについては議論を重ねていく必要があるのではないかと思います。

○戸張教育長　今のご意見を踏まえて、人権に配慮し、法的な部分においては、専門家にしっかりとご意見を伺いたいと思います。加えて発達に課題のあるお子さんについては、就学前のタイミングから適切に支援していくことが重要だと思っているので、これは教育委員会だけではなくて、他課とも協力をしながら、保護者にもしっかりと支援できるようにしたいと思っています。また、いじめの早期発見のためには、これまでの方法だけでなく複数の方法で情報をキャッチしたいと思っています。

○中村教育部長　インターネットに関する部分ついて､あまりご意見がなかったのですが、これについても、同じようにいろいろな専門家の方々のご意見を頂きながら、検討してまいりたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

○中原市長　それでは、これをもちまして終了とさせていただきます。ありがとうございました。

○中村教育部長　中原市長ありがとうございました。それでは、報告に入らせていただきます。「令和３年度危機管理研修会報告書」について、報告をさせていただきます。事務局から説明をいたします。

○砂賀学校支援担当主幹兼少年センター所長

【資料４「令和３年度　危機管理研修会報告書」について説明】

○中原市長　委員の皆さんからご意見いただいて、シミュレーションをここ数年間続けてきました。ようやく教頭先生や各小中学校でのシミュレーションまで到達したかなと思い

ますが、先生方も毎年毎年変わっていきますし、校長先生も変わられていくので、これも先ほどお話があったように、継続をしてさらに発展させていかなければいけない事項だと思いますので、この報告書に目を通していただいて、令和４年度に行うシミュレーションに対して、ご意見をいただければと思います。基本的には学校で進めながら、市長部局と教育部、校長先生が入ったシミュレーションは年１回は必ずやる方向性でまとめたいと思います。

○中村教育部長　ありがとうございます。来年度につきましては、先生方の研修となりますので、夏休みに向けて計画していきたいと思っています。その前にできれば７月の初旬くらいに校長先生方に向けたシミュレーションが出来ればと計画しているところでございますので、また改めてご通知させていただきたいと思っています。

それでは以上をもちまして、令和３年度第１回吉川市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。

吉川市総合教育会議要綱第５条第３項の規定により署名する。

令和４年１月３１日

教育長職務代理者　中島　新太郎

教育委員　　小林　照男